伊賀市教育研究センター　　令和５年９月６日　第３９９号

研修ニュース

〒518-0814　三重県伊賀市上友生 785 番地
TEL&FAX：0595 (21) 8839　　E-Mail：iga-ken@iga.ed.jp

研修講座　B-3　人権・同和教育【3回連続講座】②を実施しました！

「なかまづくりは『隠れたカリキュラム』」

【講師】　伊賀市教育委員会人権教育アドバイザー　来原　成壽　先生

８ 月８日(火)、講師に来原成壽先生をお迎えして、「人権・同和教育３回連続講座②」を実施しました。今回は、三重県教育委員会事務局より川口成紀先生、池山浩隆先生にも助言者として参加いただきました。

前半はグループにわかれ、各自のレポートをもとに、１学期に進めてきた「なかまづくり」の取組や視点となる子どもに対しての働きかけなどを交流しました。レポートに書かれていることに対しての質問や書かれていないけれど気になることなどを出し合いました。そのやりとりのなかで、家庭訪問や保護者と関係づくり、２学期の人権学習、日常的ななかまづくりなど、具体的な話をする姿がみられました。子どもの言葉や保護者の言葉などの事実をもとに、自身の取組を振り返ったり新たな視点に気づいたりすることができ、あっという間に時間が経ちました。

後半の全体会では、まず、池山先生、師井先生、川口先生から各グループ交流の様子を話していただきました。その後、来原先生から「教育的に不利な環境のもとにある子を捉えられているか」「なかまづくりの意味を理解し、具体的な教育活動として取り組まれているか」「レポートの小見出しに担任としての主張（メッセージ）が込められているか」など全員に向けて話をしていただいた後、受講者２２人全員のレポートについて、一人ひとりにご助言いただきました。

その中で、２点のことについて繰り返しご指導いただきました。１点目は、「なぜその子が、教育的に不利な環境のもとにある子なのか」という部分がレポートから見えにくいということでした。学校生活で見える部分だけでとらえるのではなく、家庭訪問を通して家庭でのくらしぶりを掴むことが大切であることを改めて確認しました。２点目は、「レポートの小見出しに担任として主張（メッセージ）が込められているか」という部分がレポートを読んでいても読みとれないということでした。担任としての課題意識を小見出しにすることで取り組みを明確にすることが大切であることを学びました。

今回のレポートについて、来原先生から教えていただいたことを今後の取組に活かしていくとともに、教職員みんなで共有する時間を取っていただければと思います。

アンケートより【一部抜粋】

・日常的ななかまづくりの取組がAにとってどんな力がつくのかを考えること、教師のためではなくA自身のしんどさ、生活背景から考えた教育活動をしていくことが大切であると感じました。また、綴り方を取り組んでいく中でAや周りの子にどんなことを綴らせたいのか、明確に捉えて日常的なくらしを出し合えるようにしていこうと思いました。(小)

・なぜAが視点生なのか、教育的に不利な環境のもとにある子どもの捉えやレポートにどう書いていくかが課題であると感じました。また、日常的な具体的取組をどうしていくことがAにつけたい力につながるのか改めて考えていきたいです。(中)